

# 巻頭言

理事長・編集長 宮田 和 実

聴覚障害者の歴史を紐解いてみると、戦後まもなく設立された「新光会」と「みより会」の名前が出てきます。共に、六十五年以上の歴史があり、設立後暫くの間は、聴覚障害者同士の親睦・交流の他、多くの福祉活動を牽引していました。その後、各地に、差別撤廃や健常者同様の権利を求める活動を主体とする中途失聴・難聴者が設立されることよって、この二つの団体の主目的は、親睦・交流や情報収集と会員への提供などへと変わっていききましたが、その活動は、絶えることなく、脈々と続いていたのです。そして、団体同士の交流も続いていました。福祉大会など、聴覚障害関係のイベントで顔を合わせることも多く、親交を温めてきました。

しかし、今回のコロナ禍は、どの団体にも、容赦なく襲ってきているようで、

「いかがですか？」という事務局からのメールでの問いかけに、事務局長から、丁寧な長文の返信を頂きました。

ので、許可を得て、掲載させて頂きます。

巷では、政府がテレワークを推奨していることもあって、ウェブ会議が一般的となつていきます。一昔前までは大袈裟な機材を必要としていたウェブ会議もパソコンの発達によって、簡単にできるようになりました。方法は様々ですが、Zoom（ズーム）というソフトを使ったものが主流のようです。みより会のパソコンサークル・ピノキオなどでも、Zoomの講習を積極的に行っているようで、コロナ禍が収束するまでは、理事会や例会なども、Zoomを使って行いたいと考えています。問題は、情報保障をどうするかなのですが、遠隔入力による文字通訳を認めている自治体も増えて、そういった地域では、今まで通りの派遣制度を使って、Zoomに、文字情報として入力することが可能なのですが、東京都

は、九月から利用者が機材等を用意すれば、団体派遣の要約筆記をZoom内に取り込むことは認めることになりましたが、肝心の遠隔入力は認められておらず、Zoomに取り込むことは認めない自治体もあり、障害者差別解消法が施行されている戦後七十五年を経ても、まだまだ障害者差別解消運動が必要な状況です。仕方がないので、取り敢えず、有料の文字通訳者を頼んだり、音声認識という技術を使って凌ぎたいと思っておりますが、音声認識もまだまだ完全ではなく、頼りにならない部分もあります。その辺のところは、十六〜十七頁を御覧頂きたいと思えます。

今号には、久し振りに『みより俳句』も掲載しました。テレビでも、NHKの真面目な番組だけでなく、民放のバラエティー番組でも、俳句が取り上げられています。会員の皆様も、この機会に、是非、取り組んで頂きたいと思えます。

× ×

みやた かづみ(栃木県那須塩原市)